立命館大学
日本文学会 ニュース No. 2
「論究日本文学」第九号付録 1958.11.30

土佐日記創見

国崎望久太郎

1

古典文学の研究が、訓話注釈や書誌学的研究に中心がおかれてきたのには理由がある。また近代文学の研究が、主として文学評論的性格をもたざるをえぬのも、当然である。けれどもこの二つの傾向は相互に尊重しあい、補充しあうべきものでこそあれ、排除しあうべきものではない。ところが根強い偏見は学者のあいだにいまだに残っている。そしてこの点は古い型の国文学者の中にいちじるしい。

文献学的実証主義の限界と本質を確認しておかねば、そういう研究を基礎的研究と称することに安易な気持をもってしもう。そして文学評論的方法への理論的反省を怠る口実にしてしまう傾向がある。その点では、近代文学の研究者の間にみられる実証探求熱は、当然のことながら、正しい理論的反省をふまえていて、成果もあがっているように思う。

2

土佐日記の研究の中で、われわれの注目をひくのは、香川景樹の「土佐日記創見」の特殊な地位である。自信の強い景樹は、古今集の注釈にして自著に「古今和歌集正義」と名付けたように、この土佐日記の研究にも「創見」と自信たっぷりな題名をえらぶのに躊躇しなかった。彼の自信は陽性で、グヅグヅした陰気さがなくてよい。

その中で土佐日記の文学的性質を要約して次のようにいっている。

土佐日記は、紀気氏彼国の任解て、承平四年の冬、帰洛の日に臨みて、鐘愛の女子を失れたる其歎きに堪かねて、ひそかに思ひをやり給へる書也。

すなわち景樹は、土佐日記を単なる紀行文としてではなく、紀行文の背後に作者の創作動機をさぐっている。「此書の大むね、亡児の悲みを主とし、下に海賊の恐りをふみ、是をかすむるに全文俳諧をもてす。此三つの大事を遣して、古来此日記を説来れるは、足を攘ひて鼎を置也。竟に其説たつ事なけん。」これが、景樹の意見である。

3

われわれは、いま景樹の見解について同意したり反対しようとするのではない。ただ彼が貫之の文学的主体にできるだけ近づき、それをあきらかにしようとした態度を紹介したにすぎない。そして古典文学が文学である以上、やはり、こうした態度と方法への反省がなければ、古典の面白さなどは、ついによみがえる機会がないといってよい。景樹は貫之の主体に肉迫し実存を摘出して、そこから土佐日記や古今集の貫之歌を解釈しようとした。あたっているものも、あたらないものもあろうが、文学に対する態度としては、真淵よりより近代的な且つ正統的な立場であったに違いない。わたしはそう信ずる。